

■ロシア：サヤノ・シュシェンスコエ水力における爆発事故の調査結果を発表

2009年8月17日にサヤノ・シュシェンスコエ水力発電所のNo.2ユニットが爆発し、死者75名、負傷者13名を出した災害事故について、ロステフナゾル（連邦エコロジー・技術・原子力安全監視局）に設けられた事故調査委員会は2009年10月3日に事故調査の結果を発表した。それによると、事故前日の夕方に通信回線の火災事故により負荷調整に使用されるブラーツク水力発電所（シベリアのイルクーツク州。通常時において同発電所は、地域の負荷調整の80%、サヤノ・シュシェンスコエ水力発電所が20%を担っていた）の制御通信回線が不通となった。このため、シベリアの系統運用者が地域の負荷変動の全てをサヤノ・シュシェンスコエ水力発電所によって調整するという指令を出した。しかし、それがサヤノ・シュシェンスコエ水力発電所の調整能力を超えたため、水圧変動を引き起こした。その結果、水車カバーのボルトが破損したため、ローターに働く上向きの力により水車カバーを破壊したことが原因とされた。また、事故後の調査で49個あるボルトのうち6個について破損した痕跡が認められなかったことから、ナットが取り付けられていなかったことが指摘されている。なお、事故の責任者として24名の名前が挙げられている。その中には、事故の前提をつくった責任者として旧ロシア単一電力系統社（RAO-EES）のCEOだったチュバイス氏、その前任者のジアコフ氏、技術関連の最高責任者であったバインジヘル氏らの6名が含まれており、今回の事故が過去における技術的また組織的な問題によって引き起こされた可能性を示唆している。